

# ブラジル人幼児の事例による否定を伴う変化表現の習得の特徴

久野 美津子

## 【要旨】

本稿はブラジル人幼児の否定を伴う変化表現「否定+なる」構造習得に焦点を当てた事例報告である。調査の結果、同構造で「否定」と「なる」との接続方法の誤りはなく、「否定」の語彙に関する誤りが観察された<sup>(1)</sup>。それは語彙の誤選択とナイ形の誤りであった。「否定」で使用された語彙は通常否定表現で既に使用されており、「否定」で見られた誤りは通常否定表現でも観察されていた。よって、通常否定表現は「否定+なる」構造習得の前段階となるものであり、通常否定表現での誤りは「否定+なる」構造にも影響を与えると予想された。「否定+なる」構造では、先行研究で見られた習得過程は観察されなかった。否定を伴わない変化表現の場合には、学習者は品詞の種類を区別し、複数の接続方法を覚える必要があるが、「否定+なる」構造では、品詞が何であれ、ナイ形がわかれば「～なくなる」で表現できるため、習得はそれほど困難ではなかったと予想される。

## 【キーワード】

第二言語習得、ブラジル人幼児、変化表現、否定表現、「否定+なる」

### 1. はじめに

本稿は、第二言語 (L2) として日本語に接したブラジル人幼児 2 名の発話資料を基に、変化表現「～なる」構造のうち、否定を伴う「否定+なる」構造に焦点を当てた事例報告である。「～なる」構造は、前接する品詞によって接続方法が異なり、品詞が名詞やナ形容詞の場合には「～になる」(例：医者になる、有名になる) のように変化し、イ形容詞の場合には「～くなる」(例：暑くなる) のように変化する。これまで、同構造の習得に関して、母語 (L1) 学習者および L2 学習者には、「に」の脱落 (「\*Φ」) や「に」を「が」とする誤りなどが報告されている (鈴木1978、横山1991、松田・斎藤1992、久野2005)<sup>(2)</sup>。しかし、同構造に焦点を当て、習得過程を記した研究は多くない (久野2005)。久野 (2005) は「～なる」構造の習得過程を調査してはいるが、否定を伴う変化表現 (例：分からなくなる) に関する報告はないため、その使用状況や習得の特徴などは明らかではない。そこで、本稿では、久野 (2005) で明らかにできなかった「否定+なる」構造の使用状況を調査し、先行研究で観察された習得過程と比較しながら、習得の特徴を記したい。

### 2. 先行研究

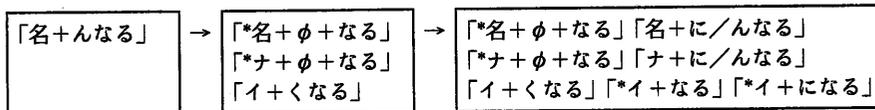
「～なる」構造に関しては、これまで L1、L2 ともに「～なる」を使用した発話例がいくつか報告されているものの、習得過程を体系的に記した研究はほとんど見られない (永野1959、大久保1967、鈴木1978、横山1991、松田・斎藤1992、久保田1994)。まず、L1 先

行研究の場合、永野 (1959) には「これが こんなになっちゃったんですけど (2歳7ヶ月)」、大久保 (1967) には「ふたちになったの (2歳1ヶ月)」「マンボ いなくなった (2歳3ヶ月)」などの発話例がある。また、横山 (1991) では「に」を「が」とする代用の誤りが観察されている (例: \*ひろくんも おにいちゃんになる (2歳5ヶ月))。

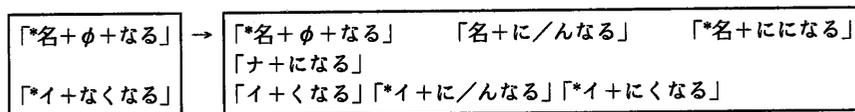
次に、L2 先行研究では、格助詞研究の中で、「変化結果」の「に」として「～なる」構造に触れているものもある (鈴木1978、松田・斎藤1992、久保田1994)。このうち、初級レベルの成人英語母語話者2名を調査した久保田 (1994) には、「～になる」の文脈で誤りの報告はされていない。これに対し、松田・斎藤 (1992) では、初級レベルの韓国人成人2名の6ヶ月間の発話データから、「に」を「が」とする誤り (例: \*皆私のものになります) が報告されている。また、鈴木 (1978) は、L2 学習者によく見られる誤りとして、「に」の脱落 (例: \*休みなる) や「に」の過剰使用 (例: \*暑くになりました) などをあげている。しかし、これらの研究はいずれも「～なる」構造に焦点を当てたものではなく、その習得過程は明らかではない。

久野 (2005) は、ブラジル人幼児2名 (Y児、K児) の19ヶ月間の発話資料を基に、「～なる」構造の習得過程について調査している。結果は、まず「動 (詞) + ようになる」構造では、両児ともに、その出現時期が他の構造に比べて遅いか、あるいは観察されなかった。次に、「名 (詞) + になる」「ナ (形容詞) + になる」構造では、Y児には習得の最初期に「ん」 (例: 赤んなった) の使用も観察されたが、両児ともに「\*Φ」のみが観察される段階があり (例: \*変なっちゃった)、その後「に」 (または「ん」) が継続的に使用され始めるが「\*Φ」も併用されるという段階がある点で共通していた。これら両構造で「に」が使用され始めた時期はほぼ同時期であったことから、両構造の習得過程は類似していると考えられた。そして、これらの構造で「に」が正しく使用されるようになると、「イ (形容詞) + くなる」構造や「こう+なる」構造でも「に」の過剰使用 (例: \*かわいいになる、\*こうになる) が観察されたり、「\*イ+なる」 (例: \*大きいなる) などの誤りが観察されたりするようになった<sup>(3)</sup>。(1) はY児の、(2) はK児の「～なる」構造の習得過程を大まかに示したものである。

(1) L2 Y児の「～なる」構造の習得過程



(2) L2 K児の「～なる」構造の習得過程



また、久野 (2005) は L2 児の結果を L1 児の事例と比較した。その結果、「動+ようになる」構造の出現時期が遅い点や、「名+になる」「ナ+になる」構造の場合、まず「\*Φ」

が観察される段階があり、後に「に」と「\*Φ」が併用される段階がある点で共通していた。一方、「イ+くなる」構造の場合、L2児の方が誤りが多く見られた点で異なっていた。これらの結果から、L2児にとって、形容詞の種類を識別することや、品詞によって異なる幾つかの接続方法を認識することなどが困難であることがうかがえた。

これまで、「～なる」構造に関する事例研究は少なく、また、否定を伴う場合（例：分からなくなる）の事例研究もほとんどないと思われる。「否定+なる」構造の接続方法は、イ形容詞の場合と同様、「～くなる」である（友松他2000）。久野（2005）では、「イ+くなる」構造でL2児に多くの誤りが観察されていた。したがって、イ形容詞と同様の接続の変化をする「否定+なる」構造では、「イ+くなる」構造で見られたような誤りが観察される可能性もなくはない。そこで、本稿では、「否定+なる」構造の使用状況を調査し、先行研究で見られた、名詞や形容詞などの変化表現の習得過程と比較しながら、その特徴を記したい。

### 3. 調査

#### 3-1 観察方法

対象児はポルトガル語をL1とするブラジル人幼児2名（兄Y、妹K）である。彼らはブラジルで生まれ、その後来日し、掛川市内の保育園に入園した。彼らの入園直後から19ヶ月間の発話資料を分析の対象とした。表1は彼らの来日年齢や観察時の年齢などを示したものである。

表1 対象児の年齢

対象児	来日年齢	入園時年齢	観察時の年齢
Y児	2歳0ヶ月	4歳7ヶ月	4歳7ヶ月－6歳1ヶ月
K児	0歳11ヶ月	3歳6ヶ月	3歳6ヶ月－5歳0ヶ月

観察方法は、筆者が原則として1週間に1度保育園を訪問し、1名につき約1時間、発話や状況等を記録することにより行った。発話は全てテープ録音し、後に文字化した。分析資料は対象児の自発的発話であり、他人の真似、日直の挨拶等は対象外とした。調査項目は、変化表現のうち否定を伴う「否定+なる」構造であり、誤りであっても、文脈上、当該構造を意図した発話であると判断できるものは調査対象とした。「否定」には、イ形容詞、ナ形容詞、名詞、動詞、副詞などすべての品詞を含む<sup>(4)</sup>。「無くなる」という表現については、一つの動詞と捉えることもできるだろうが、「無いようになる」（林1985）という変化の意味も含むと判断し、調査の対象とした。

#### 3-2 ポルトガル語での表現

変化「～なる」に相当するポルトガル語の動詞には、virar、tonar-se、ficar、fazer-se、serなど様々なものがある（日向1994、池上他1996、姫野・鈴木1999、石沢・豊田2000、Perini 2002）。また、否定を表すには動詞の前に não をつければよい（浜口・佐野1970、

黒沢1988)。しかし、「否定+なる」構造に相当するポルトガル語では、*não* および「なる」に相当する動詞を用いた表現だけでなく、これらを用いない表現も見られるようである。以下(3)～(5)は「否定+なる」構造に相当するポルトガル語の例である。このうち、(4)は形容詞の場合であるが、例えば「暑くなくなった」は(4a)のように *ficar* (「なる」)を用いることもできるが、*estar* (「いる、ある、～という状態だ」)を用いた方が一般的であるという。また、(5)は動詞の場合であるが、(5a)は *não* を用いず *difícil* (「難しい」)を用いた例、(5b)は *não poder* (「できない」) や *mais* (「もう」)によって「もう～できなくなった」を意味する例、(5c)は *desaparecer* (「消える」)という一語の動詞によって表現した例である。(5d)では、*estar* を用い「彼女は(さっきはここにいたが今は)いない」と表現することで、「いなくなった」に相当する内容が表せるという。

(3)「名詞否定+なる」

*Ela não se tornou uma professora.*

彼女 ない なった 一人の 先生

(彼女は先生じゃなくなった)

(4)「形容詞否定+なる」

a. *Ultimamente não ficou quente.*

最近 ない なった 暑い

(最近暑くなくなった)

b. *Ultimamente ela não estava bonita.*

最近 彼女 ない だった きれい

(最近彼女はきれいじゃなくなった)

(5)「動詞否定+なる」

a. *Envelhecendo, vai se tornando difícil ler letras pequenas.*

年を取る ～なる 難しい 読む 字 小さい

(年を取ると小さい字が読めなくなる)

b. *Como enqordei, não posso mais vestir minhas roupas favoritas.*

だから 太った ない できる もう 着る 私の 服 好きな

(太ったから、好きな服が着られなくなった)

c. *A minha mala desapareceu.*

私のかばん なくなった

(私のかばんがなくなった)

d. *Ela não está aqui.*

彼女 ない いる ここに

(彼女はいなくなった)

このような言語事実から、「否定+なる」構造に相当するポルトガル語の表現は様々で

あり、全ての品詞に共通した特別な規則があるともいい難いようである。一方、日本語では、どの品詞の場合もナイ形を用いて「～なくなる」という形式で表現される。当該構造での形式が、L1では複数あるが、L2では1つであるという対応関係は「統合」と呼ばれ、習得の難易度は比較的容易であるとされている(野田他2001)。このことから、本対象児にとって、「否定+なる」構造習得はそれほど困難でないことも予想される。また、彼らのL1では、変化を意味する語彙を使用しなくても、「～なくなる」とほぼ同等の内容を表現することも可能なことから、「否定+なる」構造そのものがあまり使用されない可能性も考えられる。

### 3-3 調査結果

Y児とK児の結果は表2と表3に示した。まずY児(表2)の場合、「否定+なる」構造で観察された表現は「なくなる」「いなくなる」「見えなくなる」「出なくなる」の4種類であった。同構造が初めて観察されたのは10ヶ月目であった。その後、11~14ヶ月目には観察されなかったが、15ヶ月目以降に再び観察された。

誤りは2種類観察された。1つは、本来「いなくなる」とすべきところで「\*なくなる」と表現したものであり、16ヶ月目と17ヶ月目に観察された。もう1つは、「でなくなる」とすべきところで「\*でしなくなる」と表現したものであり、16ヶ月目に観察された。

表2 Y児の「否定+なる」構造の使用状況

構造\月数	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
(年齢:~歳~ヶ月)	5;3	5;4	5;5	5;6	5;7	5;8	5;9	5;10	5;11	6;0	6;1
なくなる	—	1	—	—	—	—	2	4	2	1	—
いなくなる	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—
*なくなる	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—
みえなくなる	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
でなくなる	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—
*でしなくなる	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
計	0	1	0	0	0	0	3	10	3	2	0

Y児の発話例は以下(6)の通りである。発話例の<>は発話時の状況、発話例の最後の( )は発話時期である。

#### (6) Yの発話例

- <指を隠しながら> なくなっちゃったよ。(10ヶ月目)
- <隠れながら> ヤンくん いなくなっちゃった。(15ヶ月目)
- <教室に誰もいないのに気づいて>\*あれー、なくなっちゃった。(16ヶ月目)
- <狭いところにはまって動けない> でなくなっちゃったよー。(16ヶ月目)
- <観察者の携帯電話が途切れたのを見て>  
もしもしー。\*でしなくなっちゃった。(16ヶ月目)

次にK児（表3）の場合、「否定+なる」構造で見られた表現は「なくなる」「いなくなる」「みえなくなる」「わかんなくなる」「いたくなくなる」の5種類であった。同構造は11ヶ月目に初めて観察され、その後はほぼ毎月観察された。誤りは16ヶ月目に1度観察された。それは「なくなる」とすべきところで「\*いなくなる」と表現したものであった。

表3 K児の「否定+なる」構造の使用状況

構造\月数	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
(年齢：～歳～ヶ月)	4;2	4;3	4;4	4;5	4;6	4;7	4;8	4;9	4;10	4;11	5;0
なくなる	—	—	1	—	1	1	2	—	1	1	—
*いなくなる	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
いなくなる	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
みえなくなる	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—
わかんなくなる	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
いたくなくなる	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
計	0	0	1	0	1	2	2	1	2	3	2

K児の発話例は（7）の通りである。

（7）Kの発話例

- a. <電池を入れ替えている様子を見ながら> なくなっちゃった？（11ヶ月目）
- b. それで いたくなくなっちゃった。（14ヶ月目）
- c. \*ドレミちゃんのビデオね いなくなっちゃった。（16ヶ月目）
- d. もう ゆきだるま みえなくなっちゃった。（17ヶ月目）
- e. わたしのおなまえ わかんなくなっちゃった。（18ヶ月目）
- f. おとこのこ いなくなっちゃった。（19ヶ月目）

3-4 先行研究との比較

本稿の結果を、久野（2005）で得られた「名+になる」「ナ+になる」「イ+くなる」「こう+なる」「動+になる」構造での結果と比較する。以下では出現時期と誤りについてそれぞれ述べる。

3-4-1 出現時期の比較

「否定+なる」構造の出現時期は、Y児が10ヶ月目、K児が11ヶ月目であった。両児の「否定+なる」構造と他の各構造の出現時期を記したものが表4である<sup>(5)</sup>。

表4 各構造の出現時期（～ヶ月目）

対象\構造	否定+なる	名+になる	ナ+になる	イ+くなる	こう+なる	動+になる
Y児	10	10	12	12	14	
K児	11	9	13	10	10	19

両児の「否定+なる」構造の出現時期を、他の構造の出現時期と比べると、「動+になる」構造とは8ヶ月以上の差が見られた。しかし、「名+になる」「ナ+になる」「イ+くなる」「こう+なる」構造との差は、ほとんどないか、あっても数ヶ月間の差であった。このことから、出現時期に限って見れば、変化表現のうち、「否定+なる」構造の習得が特に困難であるとは言い難いようである。

### 3-4-2 誤りの種類の比較

両児の「否定+なる」構造および他の各構造の誤りの種類を記したものが表5である<sup>(6)</sup>。「否定+なる」構造で観察された誤りは、「否定」での動詞の誤選択とナイ形の誤りであり、他の各構造での誤りとは異なっていた。この場合の動詞の誤選択とは、「いなくなる」と「なくなる」とが混乱しているものである。また、ナイ形の誤りとは、「でなくなる」とすべき箇所で「\*でしなくなる」と発話したものである。

表5 各構造での誤りの種類

対象\構造	否定+なる	名+になる	ナ+になる	イ+くなる	こう+なる	動+になる
Y児	動詞誤選択 ナイ形誤り	「Φ」	「Φ」	過剰 「イ+なる」 不完全	—	
K児	動詞誤選択	「Φ」 過剰	—	過剰 「イ+なくなる」	過剰	不完全

「否定+なる」構造は本来「に」を必要としないことから、脱落の誤り（例：\*へんなる）が観察されることはない。ただし、「イ+くなる」構造で観察されていた過剰使用（例：\*かわいいになる）や「\*イ+なる」（例：大きいなる）のような誤りが、「否定+なる」構造で観察される可能性もなくはないだろう。しかし、このような誤りは一度も観察されなかった。また、逆に、「否定+なる」構造が原因となって他の構造に誤りが生じた、という発話例もなかった<sup>(7)</sup>。これらのことから、誤りに関して言えば、「否定+なる」構造と、他の「名+になる」「イ+くなる」などの構造とは、互いに影響を与え合っている可能性は少ないと思われる。

### 3-5 「否定+なる」構造と通常の否定表現との関わり

「否定+なる」構造で観察された誤りは、「否定」と「なる」との接続方法（「～なくなる」）に関するものではなく、「否定」での語彙選択の誤りとナイ形の活用誤りの誤りであった。「否定」で用いられる表現は「～なく」（例：見えなく）であるが、これは、ナイ形（例：見えない）が「～なく」に変化したものである。ナイ形は、「否定+なる」構造だけでなく、「見えない」「いない」のように通常の否定表現として使用されることが多い。したがって、「否定」で見られた誤りには、通常の否定表現で用いられているナイ形の表現が関わっている可能性も考えられる。そこで、「否定」で用いられた語彙が、通常の否定表現としてどのように用いられているか、彼らの発話を再調査してみた。調査した語彙は、Y児の

場合、「ない」「いない」「出ない」「見えない」の4種類であり、K児の場合、「ない」「いない」「痛くない」「見えない」「分かんない」の5種類である<sup>(8)</sup>。特に、これらの語彙の出現時期、「ない」「いない」の混乱の有無、そしてナイ形の誤りの有無の3点について調査した。

結果は、まず、Y児には上記4種類、K児には上記5種類のすべての語彙が、通常の否定表現でも使用されており、その出現時期はいずれも「否定+なる」構造での出現時期より早かった。つまり、「否定+なる」構造（例：見えなくなる）の「否定」（例：見えなく）で用いられていた語彙は、それ以前に、既に通常の否定表現（例：見えない）として使用されていたことになる。表6（Y児）と表7（K児）は、通常の否定表現および「否定+なる」構造で用いられた各語彙の出現時期を記したものである<sup>(9)</sup>。

表6 Y児の通常否定表現と「否定+なる」での語彙別出現時期（～ヶ月目）

通常の否定表現	出現時期	「否定+なる」	出現時期
「ない」	2	「なくなる」	10
「いない」	3	「いなくなる」	15
「みえない」	6	「みえなくなる」	16
「でない」	14	「でなくなる」	16

表7 K児の通常否定表現と「否定+なる」での語彙別出現時期（～ヶ月目）

通常の否定表現	出現時期	「否定+なる」	出現時期
「ない」	4	「なくなる」	11
「いない」	6	「いなくなる」	19
「みえない」	4	「みえなくなる」	17
「わかんない」	16	「わかんなくなる」	18
「いたくない」	5	「いたくなくなる」	14

次に、「ない」と「いない」との混乱は、通常の否定表現でも見られた。表8と表9には、Y児、K児それぞれの「ない」「いない」の使用状況を記した。両児ともに「ない」「いない」の混乱は長期間にわたって観察されていた（Y；4～16ヶ月目、K；3～12ヶ月目）。Y児の場合、「否定+なる」構造では「\*(人が) なくなる」という誤りをしていたが、通常の否定表現でも、「\*(人が) ない」と発話したものが多く、長期にわたっていた（表8）。一方、K児の場合、「否定+なる」構造で「\*(物が) いなくなる」という誤りをしており、通常の否定表現でも、誤りのほとんどが、「\*(物が) いない」と発話したものであった。これらのことから、通常の否定表現で「ない」と「いない」とを混乱していたために、「否定+なる」構造でも「なくなる」と「いなくなる」という混乱が生じたと考えられる。

表8 Y児の「ない」と「いない」の使用状況

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
ない	-	1	4	-	4	3	5	2	2	4	-	11	3	3	4	4	2	5
*いない	-	-	-	1	-	-	1	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-
いない	-	-	3	3	1	5	1	7	-	-	2	2	2	2	3	2	2	4
*ない	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1	1	2	-	-	2	-	-

表9 K児の「ない」と「いない」の使用状況

月数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
ない	-	-	-	3	-	-	2	5	2	7	3	12	6	14	9	10	3	9
*いない	-	-	1	-	2	1	-	7	1	2	-	1	-	-	-	-	-	-
いない	-	-	-	-	-	1	-	-	2	3	3	2	2	1	1	-	2	3
*ない	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

最後に、両児ともに、再調査した語彙のうち、ナイ形の活用を誤った発話は観察されなかった。Y児の場合、「否定+なる」構造で「\*でしなくなる」という誤りが観察されていたが、例えば「\*でしない」のような発話が通常の否定表現で観察されることはなかった。ただし、この「でない」という語彙に関しては、通常の否定表現として使用された回数が他の語彙に比べて少なく、1回だけであった。「でない」以外の語彙の使用回数は、「ない」「いない」は表8（Y児）、表9（K児）の通りであるが、この他に、Y児は「見えない」が9回、K児は「痛くない」が36回、「見えない」が10回、「わかんない」が2回であった。これらのことから、通常の否定表現としてナイ形が十分に使用されていない語彙については、「否定+なる」構造の「否定」として用いられた場合でも、誤りが生じやすくなる可能性も考えられる。

### 3-6 「否定+なる」構造習得の特徴のまとめ

Y児とK児の「否定+なる」構造の習得に見られた主な特徴を2つ記す。まず1つ目は、「否定」と「なる」との接続方法（「～なくなる」）に関するものである。この接続方法を誤った発話は両児からは一度も観察されず、期間を通じて正しく使用できていた。「～なくなる」という形式は、語彙の品詞が何であれ、すべてナイ形を「～なく」に変えて用いればよく、複雑な規則は必要ない。また、彼らのL1であるポルトガル語では、「～なくなる」に相当する表現が多様であるが、日本語では同一形式である。これらのことから、接続方法に関しては、特に混乱は生じなかったのではないかと予想される。

2つ目は、「否定+なる」構造と通常の否定表現との関わりについてである。同構造の「否定」（例：見えなく）で使用された語彙はすべて、それ以前に、既に通常の否定表現（例：見えない）として使用されていたものであった。そして、「否定」で見られた「なく」と「いなく」との混乱は、通常の否定表現でも「ない」と「いない」との混乱として長期間にわたって観察されていた。また、「否定」では「\*でしなく」というナイ形の誤りが見

られたが、通常の否定表現で「でない」が使用された回数は少なかった。これらのことから、通常の否定表現は「否定+なる」構造習得の前段階となるものであり、通常の否定表現での誤りが、「否定」の語彙の誤りの要因の一つとなっている可能性が考えられる。

#### 4. おわりに

本稿では、ブラジル人幼児2名から得た発話資料のうち、否定を伴う変化表現「否定+なる」構造に焦点を当て、習得に関する特徴を調査した。その結果、「否定+なる」構造習得では、「否定」と「なる」との接続方法に関する誤りはなく、「否定」として用いた語彙に関して、「なく」と「いなく」との混乱、そしてナイ形の誤りが観察された。「否定」として用いられた語彙はすべて、「否定+なる」構造で使用される以前に、既に通常の否定表現として使用されていた。また、「否定」で観察された「なく」と「いなく」との混乱は、通常の否定表現でも「ない」と「いない」との混乱として観察されていた。これらのことから、まず、通常の否定表現としてナイ形が使用されるようになり、その後、そのナイ形を用いて「否定+なる」構造が発話されるようになると考えられた。そして、通常の否定表現で、ナイ形の語彙を混乱している場合や、ナイ形の使用回数が少ない場合などには、「否定+なる」構造の「否定」の語彙にも、誤りが生じやすいと考えられた。

「否定+なる」構造の出現時期は、他の変化表現である「名+になる」「イ+くなる」構造などの出現時期とほぼ同時期であった。しかし、「否定+なる」構造の習得では、「名+になる」「イ+くなる」構造などで見られた上記(1)(2)の習得過程は観察されなかった。このような違いが見られた理由の一つとして、「なる」に前接する品詞の種類の違いや、それに伴う接続方法の複雑さが関係していると考えられる。名詞や形容詞などの場合には、品詞が何であるかを区別したり、それに応じた接続規則を覚えたりする必要がある。L2学習者が語彙の品詞を区別できるようになるには、相応の時間がかかるという報告もある(白畑・久野2005)。これに対し、「否定+なる」構造では、「否定」の語彙の品詞が何であれ、すべて「～なくなる」という形式で表現される。そのため、ある語彙のナイ形が言えるようになれば、その後、「～なくなる」という形式は、それほど困難を伴わずに言えるようになる予想される。

本稿は対象児が2名であり、また、発話資料から得られたデータも十分だとは言えなかった。しかし、これまでほとんど調査されていない、否定を伴う変化表現の習得の特徴をいくつか記すことができたと思われる。今後、より多くの事例を調査し、「否定+なる」構造を含む変化表現の習得過程について、さらに解明していく必要があることは言うまでもない。

#### 注

- (1) 「否定」とは「否定+なる」構造内での否定の部分(例:「見えなく」)を指す。
- (2) 当該文脈での不適格な表現には「\*」を付した。
- (3) 「こう+なる」構造とは、「～になる」「～くなる」に変化しない場合(例:こうなる、そうなる)である。
- (4) 品詞が動詞の場合、「～ないようになる」という表現方法もあるが(友松他2000)、

- 本調査ではそのような発話は観察されず、「～なくなる」という表現のみであった。
- (5) 各構造の出現時期は、必ずしも正しい表現の出現時期というわけではなく、義務的生起文脈 (Obligatory Contexts, OC; 適格文となるために、その文中で、ある項目が必ず出現しなければならない文脈) で出現した誤った表現も含む。
  - (6) 表中の「不完全」とは、「大きくなってる」とすべきところを「\*大きくなって」のように発話しているものを指す。また、表中の「-」は誤りが観察されなかったことを表す。
  - (7) K児には「大きくなった」という意図で「\*大きくなっちゃった」という発話が観察されていた。この発話が最初に観察されたのは10ヶ月目のことであり、それは「否定+なる」構造がまだ観察されていない時期であった。したがって、「\*大きくなる」という発話が「否定+なる」構造の「～なくなる」という表現の影響を受けた可能性は低いと判断した。
  - (8) これらのナイ形の表現には、「いなかった」のような過去形も含めた。
  - (9) K児 (表7) の通常の否定表現「(物が) ない」については、3ヶ月目に「\*いない」という発話が1例あった。しかし、ここでは、「ない」が正しく観察された時期 (4ヶ月目) を記した。

#### 参考文献

- (1) 浜口乃二雄・佐野泰彦編 (1970) 『ポルトガル語小辞典』 大学書林
- (2) 林巨樹 (1985) 『現代国語例解辞典』 小学館
- (3) 姫野昌子・鈴木孝恵 (1999) 『外国人児童生徒のための日本語指導<第4分冊>—ポルトガル語版文法解説—』 ぎょうせい
- (4) 日向ノエミア (1994) 『ローマ字和ポ辞典』 柏書房
- (5) 久野美津子 (2005) 「ブラジル人幼児2名による変化を表す「～なる」構造での誤りと習得過程」『日本語教育』127号 pp.31-40
- (6) 池上岑夫・金七紀男・高橋郁彦・富野幹雄編 (1996) 『現代ポルトガル語辞典』 白水社
- (7) 石沢弘子・豊田宗周監修 (2000) 『みんなの日本語初級II 翻訳・文法解説ポルトガル語版』 スリーエーネットワーク
- (8) 久保田美子 (1994) 「第2言語としての日本語の縦断的研究—格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について—」『日本語教育』82号 pp.72-85
- (9) 黒沢直俊 (1988) 『エクスプレスブラジルポルトガル語』 白水社
- (10) 松田由美子・斎藤俊一 (1992) 「第2言語としての日本語学習に関する縦断的事例研究」『世界の日本語教育』第2号 pp.129-156.
- (11) 永野賢 (1959) 「幼児の言語発達について—主として助詞の習得過程を中心に—」『ことばの研究』 国立国語研究所 pp.383-396
- (12) 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 (2001) 『日本語学習者の文法習得』 大修館書店
- (13) 大久保愛 (1967) 『幼児言語の発達』 東京堂出版

- (14) Perini, M.A. (2002) *Modern Portuguese: A Reference Grammar*. New Haven and London: Yale University Press.
- (15) 白畑知彦・久野美津子 (2005) 「L2児童による日本語名詞句構造内での「ノ」の習得」『Second Language』Vol.4 日本第二言語習得学会
- (16) 鈴木忍 (1978) 『教師用日本語教育ハンドブック③文法 I 助詞の諸問題 1』国際交流基金 凡人社
- (17) 友松悦子・宮本淳・和栗雅子 (2000) 『どなたときどう使う日本語表現文型200』アルク
- (18) 横山正幸 (1991) 「幼児による格助詞ニ→ガの置換誤用」『福岡教育大学紀要』第40号第4分冊 pp.303-312

The acquisition Process of the Japanese [negative + *naru*] Structure  
by Brazilian Children

HISANO, Mitsuko

The purpose of this case study is to investigate the process of acquiring the [negative + *naru*] structure by non L1 Japanese speakers. Samples of spontaneous Japanese speech were collected from two young Brazilian children. The results show that as for the conjunctive rule between [negative] and [*naru*], misuse was not observed. In the structure [negative + *naru*], the [negative] has to be changed into [*~naku*], so the form will be [*~nakunaru*]. Even this rule change was correctly applied, mistakes were observed in several situations. First, misuse occurred when the subjects confused the verbs *inaku* (used in the case of persons) and *naku* (used in the case of things). Second, inappropriate inflection of the *nai*-form of verbs were observed.

The words, which were used as [negative], had already been used in negative sentences. Furthermore, the confusion of verbs between *inaku* and *naku*, which were observed in [negative], had been observed in negative sentences as the confusion between *inai* and *nai*. Therefore, the negative sentences may be the preceding stage of the [negative + *naru*] structure, and the misuse in the negative sentences may affect the misuse in [negative + *naru*] structure.

The acquisition process, which we observed in the case of [*i*-adjective + *kunaru*], [*na*-adjective + *ninaru*] and [noun + *ninaru*] structures in the preceding study, was not seen for the [negative + *naru*] structure. In the case of adjectives and nouns, the learners had to recognize the Parts of Speech and had to use proper conjunctive rules one by one. However, in the case of the [negative + *naru*] structure, when the learners had mastered *nai*-form of the words, they had only to apply it to the [*~nakunaru*] form. Therefore, it might be said that they had little difficulty in learning the [negative + *naru*] structure.